

高木歯科医院駐車場（下町）

加地 勝（代表）：ここが高木さんです。
屋号は角屋です。ここからはこのとおり細い道になります。これが今の立日橋付近にあった日野渡しのところへ続いていました。あと、通りの反対側のあれが有山さんです。古いレトロ調の建物、あれが昔の日野銀行で、銀行をやっていたときの建物です。それから、ここら辺にお蔵がありまして、今そこに歯科医院がありますけれども、あれがこちらの方にありました。高木歯科医院の看板から向こうの低地、そこに明治20年代初頭に中央線の列車を誘致するために煉瓦工場を作ったんです。今は中央線の上りに日野煉瓦の橋げたがありますが、



日野銀行（有山家）

その煉瓦をその低地のところで焼いたわけです。その工場そのものは実は2年間しかやらなかったんです。大体、日野の古い有力者といえますか、高木さんであり、有山さんであり、溝呂木さんであったり、そういった方たちが大体ここら辺に住んでおられた。あと、そこには寄りませんけれども、ここには西明寺というお寺がありました。東の地蔵と呼ばれています。宿場の入口。宿場の西の出口といえますか、八王子から来ると、入って来るのが坂下地蔵、旧踏切のところ。宿の入口、出口、向こうから言うと入口、出口ですか、それぞれにお地蔵さんがありまして、旅人の安全、それから悪疫が入ってこないというのを願ったというので、そこにお地蔵さんがありますので、今度お寄りください。



有山家前 明治期 渡辺良勝氏所蔵

石嶋日出男（図書館）：こちらを見てください。

この写真は今度の写真集に載せているやつですが、ここは甲州街道です。石垣が左手に見えると思います。今、車があっても見えませんが、このところの石垣。先ほど日野銀行の話がされましたが、これがあそこに今見えているのと、この辺を見てください。ほとんど同じですね。

こういうところですよ。写真集に載っています、石垣はね。あそこのレスカというところに昔中嶋さんって、嶋屋（屋号）ですかね。今は場所を移られているけど、中嶋さん。その後は土方さんでしたか、こっちに連なっているんですけど。それでこのところに堀があるんですね。という 1 枚です。

今度反対側に行ったところの写真から見るとこれなんですけど、さっき言われた高木さんのここ、そこ写っていますよね、煉瓦。このところでちょうど見えるのが、有山さんのところがこの辺かなという感じですかね。ちょうどカーブしているので、向こう側に移られるとよくわかると思うんですけども。これは大正 15(1926)年に日野橋が開通して、その後、昭和の初期ということだそうです。

不明：ここは工場だったところですか。

石嶋：これは消防小屋です。向こうに行くとわかります。



高木家（角屋）

昭和 50 年代 高木憲二氏所蔵



（移動中）

加地：これが旧甲州街道になります。面影がまだ残っておりますので見ていただこうかなと、かなり低くなっています。

不明：このところですか。

加地：そうですね。

（移動中）



谷富二（谷仲山）：ここに木があったんですよ。ところが昭和 20(1945)年に空爆にあったときに、大分木が傷められたので、それで少なくなってしまったんですね。つい最近まで、この裏の方の人、中嶋さんや何か通るにはまだ木はあったんですが、もう古くなって大きくなったので屋敷に邪魔になるんで切って材木にしようとして、宮崎さんとか八王子の材木屋さんへ

持って行ったら、中に爆弾とか高射砲の破片が入っておって、それでそういうような加工はできませんと断られて、それでそういう材木として使うことはできなかったんです。現在でも上田に行きますと、まだ柿の木が残っておって、その柿の木に、これは 10 年ぐらい前なんですけど、磁石を持っていくとわかるんですよ、破片が入っているのが。そういうようなところ、いわゆる爆撃を受けたところですね。そういう名残りがまだあります。爆弾ですね。ですから中島さん、いわゆる屋根屋さんね、瓦屋さん、そののそこには木が残っていますが、それもよく調べると、そういう破片が入っているということです。

(移動中)

加地：この先に下河原の観音堂というのがあります。

(移動中)

滝瀬圭子宅脇（下河原）

谷：こういう写真がありますけどね。これがここに露木鍛冶工場、一般に露木さんという鍛冶屋さんがあったんです。日野には鍛冶屋さんというのは、この辺は露木さんと仲町の加藤さん、それと三沢に露木さんがある。この露木さんの弟さんが店を開いたわけです。露木さんというのは八王子に住んでおまして、八王子から日野へ来たわけです。戦争中はいろいろと家で仕事をしている人は徴用工とかいうので軍属みたいに軍需工場の手伝いをさせられて東大和の工場に行っておったんですね。ですから、仕事は戦中は、勤めが終わって自分の家でやると、奥さんがほとんど細かいことは全部やっていたわけなんです。ですから、当時の人は、そ

のうちの奥さんは大変だったんです。旦那さんが工場へ行くと、その後のことをやらなくちゃならない。それで周りが全部農家ですからね。農機具等の修理とか、あるいは製作を頼まれると、農機具というのは時期時期によって必要ですから、時期を逃すと困るわけですね。そうすると、旦那さんは昼間工場へ行って、夜は家の仕事をして、奥さんは朝から



露木鍛冶工場 昭和 10 年代初頭

猪鼻洋助氏所蔵

晩まで家の仕事とお店の仕事をやっておったわけです。それで、この前が猪鼻さん、今現在、猪鼻さんがいますね、自転車屋さんが前にあったわけです。こちらに有山さんがいます。

加地：この方が猪鼻さんのおじいちゃん、今 97 歳かな。今、店を継いでいる洋助さんは写っていません。

石嶋：これが露木さんの奥さんです。今もご健在で 100 歳に近い方です。

谷：猪鼻さんはここに来る前は、何でここへ来たかというのと、立川に兄さんが、猪鼻自転車屋があるんです。錦町にね。それでこちらに来たんです。出身は川越なんです。川越へ行くと猪鼻町という町名があります。

加地：店の中に猪鼻さんの看板がありますね。

谷：ですから、これが、先ほど言った旧の甲州街道です。万願寺の渡しへ行くところの街道です。

加地：そこに古い建物がありますけど、あれは下河原の観音堂ですね。ただいまお聞きしましたけれど、あそこの中の仏像は 10 年ぐらい前に盗まれたということで、石造、そういった紛失が多くなっています。残念なことです。

石嶋：このあとコレラ庚申塚に行って、その後、土方さんに 9 時半という話をしておりますので、ちょっと速めに。

(移動中)

谷：この工場は昭和 39(1964)年にできたということですね。そして、ずっと今までやっておったんですが、やはり工場のいろいろな設備とかいうことの関係で、場所は広いんですけども、施設そのものが効率的になってないんですね。そんな関係で神奈川県の名市へということになっています。

(移動中)

加地：これがなくなりますんで、そっちの道がなくなりますんで、旧甲州街道があったという道標をつくってくれと市の方に要望しているんです。

(移動中)



コレラ庚申塔

加地：これが万延元年、1840 年につくりました庚申塔なんです。庚申塔というのは 60 日に 1 回、また 60 年に 1 回、かのえさるという十干十二支を組み合わせた形で、何だかの 57 番目かな、かのえさるという日がありまして、その日にかのえさるの日に、体の中に三尸という虫がいて、それがその晩、夜中に自分の体から

抜け出して帝釈天、天帝に、自分が寄生している人の悪口を、この人間はこんな悪いことをしたということを告げるわけです。そうすると、そんな悪いやつは生かしておかなくともいいやということで、天帝、帝釈天がその人の寿命を縮めるということから、庚申の日はその虫が体から出ないように夜明けまで起きています。ただ起きていたんじゃつまらないので、いろいろなお話をしたりして、まあ一つの講ですよ。それをつくりまして起きているということなんです。話は変わりますが、今でも若者たちの間で庚申を楽しむという会を東京の方でやっています。これは、その日集まりまして遊ぶということもあるんですけど、例えば、ドライブに行ってみたり、どこどこへ行ってみたりと、それから、そういう講をやっているという話もあります。実はこの庚申をあれしたのは、その頃、江戸でコレラが流行ったんですね。そのコレラ庚申塔を建てたので祈ったら、この村にはコレラが発生しなかったということから、この庚申塔だけコレラ庚申という別名がついているんです。実はもうちょっと 50 メートルぐらいのところにあったんです。この道の中にありました。そのときは台座もついておりましたし、実は昨日、教育委員会のコレラ庚申についての説明は菌の説明もあったんですよ。それがこの区画整理のためになくなりまして、台座もなくなり説明もなくなったということで、何だかわからないという形になっていますけど、そういったものをやっぱり回復していくのも一つの手かなと思っています。

(移動中)

土方尚功宅前（第一日野万）

土方尚功（万願寺）：皆さんこんにちは。今日はこの地域を歩かれるということで、今までこれ三つが日野宿に貼ってあったんですけど、それ以外にも自分で幾つかほかの資料も出しました。ほとんどの方、この間の写真発刊を祝う会に出られているのかな、初めての方もいられる。実は、この前が 1630 年代まで古い甲州街道ということで、日野の渡しを渡って、この先になりますけれども、そこから今通って来られた露木の鍛冶屋の方、

あちらへ出て、そして裏を、松本保さんが言うに、北裏の道から上に上がったという、それは古い関係。その後、柴崎町の方を通過高木齒医者、あそこに出てきたのがあとの甲州街道、こういうことになりますけれども、この先には一里塚があったり、歴史的には、これが昭和 22(1947)年に上空から撮った写



土方尚功さん

真ということで、これが甲州街道です、今の。この先が日野警察のところになります。これが前の今のこの道路ですね。これを通して一里塚の方へ行くと。これがここにも書いてありますが、平成 3 (1991) 年のときに上から撮って、既に万願寺駅の区画整理等が進んでいたり、それから中央道ができている、そんなことがありますけれども。



これは今通って来た交差点から南のところの高速道路の下のトンネルの部分です。この上を中央道が通っている、そんな工事のときの写真です。この前から撮った方向で、それから、これが同じ方向で、まだ中央道ができる前の段階で、これはオリエン時計、それから佐藤旭家というのが宮にありますけど、

そこのところのけやきの木とか、そんな状況です。これは、そのあと新しく、まだ今回の第 2 集にも載っていますけども、まだモノレールの工事ここまで工事が始まっていたときの段階です。それから、その後、正式にモノレールが通って今の状況に変わっている。これは平成 20 (2008) 年に自衛隊が上から撮ったときの写真ということで、ほかにもいろいろヘリコプターで撮った写真とか持っていますけど、そんなことです。



それから、この地域の中では、この道路の中で、みな北へ行く道路は万願荘へ行く、庚申塚、要するにコレラがあそこで止まったと言われている庚申塚のところから北へ向く道路で万願荘第二の前に出られた道路と、ここの今、あその紫色の車がありますけど、あれから南に行って宮方向、このことを表示している昔の石が、この三面を拓本したものですけど、大正 12 (1913) 年。向かって右、宮、上田、高幡、これが向こうへ向く道路ですね。

それから、日野と八王子方面、この前をいっているんですね。それから東に向いて田村、要するに下田の田村山安養寺ということで田村、その関係で新井、石田、ハホン、そんな石が今の生沼さんのところに保存されています。そんな状況であります。その角で撮ったのが、この家が、道路はこれでいくとこうですね。この前の道路がこの間にあって、これが、この家のアパートのすぐ先のところですね。それで生沼さんの家は建て替えてますけど、平屋の家が建て替えて2階屋で、現在、道路に並行で北側へ引いたと。こんな状況になっています。



道標の拓本



昭和 32 (1957) 年夏

矢島寿男氏撮影

これは撮った位置が高速道路の下のところトンネルが一つあるんですけど、今、工事中で入れませんが、そこの位置ぐらいから撮って、

西の方向、要するに警察の方向を撮っているのがこれですね。これ日野用水の上堰の流れになります。下堰の流れはこの裏の方に水路が流れている。今でいうとシルバービレッジ

のあの周辺のところですね。全部塞いじゃっているからわかりませんが。そういった流れが、それぞれ水田地帯ですから水路、結構いろいろありました。昔は私たちもここで遊んだり泳いだりということもやりました。そんなことで。それからお祭り関係では、第2集にも書きましたけど、この辺の地域で1回、排信、止められていた。そ



先頭が土方尚功さん



の前にも宮神輿、小さいのがこの先の神社にあるんですけど、それ担いでいましたけど、復活をされたときに、昭和 51(1976)年ですか、そのときに昔からささら流しで、この後万灯、こういう形で、そのものの絵のところを花を描いて、その絵を、これ私が描いた絵なんですけど、記念に取ってありましたんで剥がしたものを。

この大きさが大体坂東の上の枠ですね。それから「明日のジョー」とか、そのときそのときでみな絵が変わってくる、その一部でたまたま剥がしたのがありましたんで、一応掲載させていただきました。こんなこともあれで、これからあと東の方へ行かれますけれど、今ここにこれだけ裏に回らないと、この間「ちい散歩」で、そのところ、実際には歴史的にはないんですけど、たまたまこの辺を開墾された、その石碑が下の地区センターのところに佐藤俊宣が書いたものを彫ってある、そんな歴史的なものがそこにもありますけど。そのところは開墾したときに石をためたんじゃないかという程度のことで、たまたま上にある祠へ、金子さん、さっき説明した裏の家の管理になっています。

石嶋：こちらの方は。

土方：これはもう今は亡くなっちゃっていたり、メンバーで、これが前の農協のときの、この先で自動車の修理工場しているメンバー。これがうちのお袋で、12 年前ですか、亡くなっています。これこの間、「ちい散歩」で、隣の生沼さんでするので、たまたまここにいまして、「ちい散歩」のときに裏のことでお話をしています。これが私の女房です。これは男っぽいんですけど、娘ですね。家なんか、この辺も多いときは梨を 85、6 軒が多摩川梨を作っていました。今は組合に入っている人は 20 軒。そんなことで多摩川梨そのものがね、減ってしまったということがあります。田んぼなんかも東京の穀倉と言われたくらい、家がつくって米ができたんですけど、今はほとんどこういうふうな畑に区画整理で変わってしまったんで、本当に部分的に田んぼが残っている程度ということです。そんなことをお話をして。この看板なんかも自分で書いた看板です。いろんなことをやっていますが、そんなお話をさせても



らって。

石嶋：何か御質問あれば。

加地：ここで正月にどんど焼きをやって、それはどの辺ですか。

土方：どんど焼は、この地域では、これから先に行かれますと、モノレールと通路がぶつかります。その手前のところの一つ手前の信号よりも先に古い道があるんですけど、そこでやっていました。それからこの地域で、この先の高速道路、向こう側にも1カ所、スノーボーになっちゃっているけれども、そこでもやりました。そういうところはずっと廃信、消えていたんですけど、さっき言うお祭りの関係を復活、八坂のお神輿が出るようになったときに、そういったものを、どんど焼きも復活させたり、盆踊りもやりましょうということで進めています。実際にはどんど焼き、過去はそういうトンネルの場所でしたけど、今、点々と、学校予定地が向こうにあったり、今現在、その後に子どもたちが野球をやっていますけど、その場所で何軒か続けてやっています。困るんですけど、だんだんに縮小をせざるを得ない部分が出てくるかなというふうに今思っているところです。

渡辺（日野図書館分館長）：この辺の旧地名は下田、万願寺。

土方：万願寺、日野万ということで、ここにも第一日野万と書いてありますけど、要するに日野の宿に関わる万願寺、大字日野字上万願寺とか万願寺下とか、そういった万願寺なんですけど、一般的には日野のこちらの万願寺を大きくは万願寺。向こうの今の甲州街道の万願寺と、それから三角（みかど）という下田の分校がある西側、これがみな大字万願寺ということで、一口に、そういうことで万願寺といってもちょっと違うんですね、地域的に。第一日野万という名前が出ているのは、第二日野万というのが、大体この辺の次男坊といいますか、そういった人たちが出ていって家をつくって、地域的には第一日野万、第二日野万、そして、そこにできた昭和16(1941)年に万願荘ということで日野自動車の住宅ができた。それがやっぱり万願荘というので万願荘、豊田の場合は豊田荘と、そういう名前になっている原点になります。ですから、こちら辺は日野宿に属する万願寺、小字の万願寺。それをとって日野万ということを使っている、こういう実態ですね。

石嶋：ありがとうございました。

土方：実は市の職員も23年ほど、入って来た時には私も課税課か何かにかいたかなという感じがするんですけど、その後辞めて市議会議員の方を5期20年やって、今は辞めて6年目か7年目になりますけど、東京南の副組合長ということで、非常勤ですけど、やっています。いろいろとつまらない話をしました。

生沼和彦（第一日野万）：これ説明でうちに
あると言いましたんですけど、これ道路にあっ
たやつ、道路の補修工事のために抜いて倒して
置いてあったわけですね。それで数年、それで
あったんですけど、なくなったらまずいという
ことで、今はうちに保管してあります。それで
拓本をとってもらったものが家にあるというこ
とで、本体はうちに保管してあるということでございます。



生沼和彦さん（中央）

石嶋：モニュメントみたいなのができるといいですね。要望しているんですけど。

加地：それをやりたいと思っています。そのときは御報告申し上げます。

土方：向こう側のところに石神宮ということで、おしゃもじ様という名称になってござ
いますけど、かぜを引いたときに、そこにあるおしゃもじを借りていってご飯を食べる。
治ったらお礼にまた新しいおしゃもじをお返しすると、そんなことで、これも歴史的に、
まだ何人かはやっているんですね。そんな場所もあります。庚申塚とそれと、一里塚、神
社、そんなようなところかなというふうに思います。

石嶋：ありがとうございました。

（移動中）



製粉工場

加地：ここに昔、水車小屋がありました。

それがなくなりまして、こちらの表側に共同の機
械の製粉工場ができたという形なんです。

谷：それと日野では珍しく火の見櫓と消防屋が
別なんです。どこも一緒にあるのね。

生沼：これが水車小屋がなくなった後、製粉工
場ということでできた。今、機械の残りがまだ入
っています。こんな形ですけれど。昔懐かしい、
これが精米ですね、お米です。これ押し麦、これがつくやつですね、こういうふうになっ
て。向こうのやつも麦です。これこの間の地震で倒れなかったというのは、やはりベルト
がいつてるからね。

加地：実はほかの、例えば、三鷹だとかに、そういったところに野川というのがあるん
ですが、そのところも水車小屋が多くて、そ

の後をこういった水車と電気を使った精米工場にして、だからこういう形、日野でも残せれば、というのは日野に最大水車が 52 機あったんですね。だからこれは日野用水を主に使いまして、それからつくっていますので、そういった形で、今学校や何か公園に水車だけを置かれてますけれど、実際に働くと、水車



が働いたんだと。精米はこういうふうにやったんだよということを示すようなものとして、特に由緒あるようなところに一つ置きたいなという気持ちはあります。

(移動中)

岩澤泰宏宅（???)



岩澤泰宏さん

石嶋：こちらが岩澤泰宏さんです。写真集に御主人と奥様が載ってますけど、今日、説明をしていただきます。よろしくお願いします。

岩澤泰宏：皆さん、おはようございます。岩沢でございます。今日は発見隊ということで、日野市の東部であります万願地区にお越しいただきまして、まことにありがとうございます。

ここに来るまでに素晴らしい発見ができたか

なと思います。改めて私の方から言うことはありませんが、この地区は昔から米どころでありまして、この一面が田んぼだったわけです。それで昔は朝日町を歩くと、シーズンになると、カエルとか蛇が足音だとか物音に対しては水の中に飛び込むという、小林一茶の歌にありますように「蛙飛び込む水の音」なんていう言葉がありますが、そのような自然の状況が今まであったわけです。以前は農地の周りに家が点々とあったということです。今現在は逆に住宅の中に農地があるというように様変わりしました。これも区画整理で基盤整備ができて、このような現状になったというのが時の流れでございます。今ここにいる場所が、昔はここが果樹園だったんです。梨畑の中に家を持ちました。ということは、日野市でも、この部落で最盛期には 17 軒の梨園がありました。今、現在残っているのは 4 軒です。

＜録音不備によりこの間収録できず＞

梨の収穫が終わった後、慰労という意味で大した深い意味はなかったらしいんですよ。とにかく・・・いいんじゃないかということで、・・・そんな変ないわれがありました。そんなわけで・・・・。盆栽を作ってたというような主力で、現金収入、唯一の現金収入という土地柄でありました。そこで区画整理が始まって、この場所に梨畑があったんですが、昔はちょっと高いところから見ますと、白いじゅうたん、これが梨山の花ということで、白いじゅうたんが敷き詰められたような感じで点々とあったわけでございます。それを楽しみに各地域から見に来られたという経緯もございますが、私たちが一番おもしろくなかったのは、桜の咲く時期には私たちは麦の草取りをやる時期なんです。花見に行くなんて



岩澤泰宏氏撮影 平成4(1992)年



ことは全然、花見どころじゃなくて草見です、私たちが過ごした子どものころは。それほどどかな田園だったというのが昔の状況でございます。今日来てもらったのは多分一里塚の件かなと思っておりますが、おかげさまで当局の井上さんと石嶋さんから御理解で、私の写真も3枚ほどかけさせていただいております。これも区画整理の始まる前遺跡調査とか、モノレールの橋脚工事が始まったときとか、昔の一里塚の裏の道の写真だとか、3枚ほど飾っておりますが、この自宅も、ちょうど裏になります、あそこに小高い丘があります。あれが一里塚でございます。一里塚が私どもの裏庭にあった山でございます。多分、ここへ来る前に図書館の方で写真を見たと思われます

が、これもNHKで「関東ちいさな旅」というので撮影もあったんです。分刻みで撮影したんですが、たまたま来た時間が悪くて、もう暗かったもので、日野市でも一番よく映ったのがタヌキが出るということで、今の中央高速の日野台の三小の裏あたりですか、あの辺が一番よく

映ったという私も記憶しております。残念ながら一里塚だけはそういったことでカットさ

れたと。そのかわりに京王ニュースで取り上げていただき、中に石仏があったんです。それが安政3年に建造されたという、私の6代前の先祖がつくったものがあったんですが、それが写真に写ったものですから、その石仏を見たくて京王ニュースを見たという方が大分見学に来られました。それが今・・・にこの裏に祀ってあります。見てもらったら、石仏というのは往来の人に拝んでいただける場所に置かないとだめだと、家の中に置いておいたんじゃ意味ないよと言われたもので、道路に街道に面したところに祀ってあります。大分風化していますので、またこれも再度建造しなきゃならないなと思っております。そんなあれで、区画整理でちょうどこのあたりが、初めこの道路が16メートルの予定だったんです。モノレールが通るために6メートルオーバーした、幅広くとったんです、22メートル道路に。そのために一里塚が今の現代の3分の1程度に縮小されたということで、いろいろな新聞等で取り上げていただき、保存か移転かということで大騒ぎになったんですが、当局の御理解をいただいてそこに保存と。これも慶長9年ですか、1604年に徳川幕府のおかげで一里塚ができたというのが基礎づけになっております。この区画整理に伴って一里塚のボーリングをしたんです。そのときに富士山の火山灰が1センチあったという記録が出ています。その後の4年後に一里塚がつくられた。その時に一番下には灰の上に石が積んであって、その上に川砂があって、その上にさらに3層にわたって土が盛ってあったと、そういう一里塚の原型だそうです。この万願寺で一里塚が江戸から出た東海道、甲州街道、中山道、その3街道のうちで3カ所一里塚という原型があったそうです。そのうちの1カ所でございます。それで最も原型に近かったのがこの万願寺の一里塚と本の方に掲載されておりました。それをわかってて守ったのかどうかわかりませんが、一生懸命手入れをしながら管理をしてきたという経緯がございます。それで、市の史跡になりまして、市の方に寄附をいたしまして、ですから、一切管理も市でやってもらおうかと思ったんですが、ささやかなお金で、近くに居る岩沢が管理をしろと、その当時に市長さんから言われた経緯がありまして、それで小学校の3年生の社会科の本ですか、それにも万願寺一里塚ということで載ってまして、夏休みになると見学に訪れたという経緯がありまして、そのたびに草刈りをして歩き易いようにしたというのが本音でございます。そんなことでおかげさまで、あそこに原型を保っております。この家はかばったもので、ちょうど一里塚の前にあったんです。蔵が今のアパートのところにありまして、物置が逆に西を向いたような形で配置されていました。井上さんに撮っていただいた写真の中にモノレールの橋脚の部分の手前の左側にけやきの切り株があります。それが写っているのがちょうどその物置の

南側、物置の裏あたりに切り株があったというような写真が載っています。そういったことで、すべてモノレールが通り道になっちゃったために前に移ったということでありまして、あとは一里塚の道路がなくなりました、区画整理のために。それで新たな道になりましたが、あとで向こうにいけばわかりますけど、この写真を見ると、ちょうど斜めにこうなっています。それがちょうど神社の鳥居がありますね。あそこにいつている道が1本通っていたわけです。ですから、ちょうど前の敷地が一里塚の北面の西の角、それが昔の道路から家に入る **ジョウゴ路** と言ったんですが、その角に杭があったんですが、それが22メートル道路になったときの杭ということでございました。だから、それがかからなければ、16メートルならば原型のままで一里塚もあったんじゃないかなと。

蔵も移動しないで、そのままに置けたのかなと思うんですが、幸か不幸か、6メートル広げたために、こちらへ移動したということ。これも曳きやさんが大谷石の蔵を曳くのは初めてなケースだったんです。だけど、その時代としては、コンピューターでセットしますと、コンピューターで全部、ボタンを押すと一気に上がって運んできたという。東京都からもその時はマイクロバスで何台かで見学に来られました。その後、まだ最近ですけど、3、4年前ですか、瑞穂の方からも大谷石の蔵を曳いたというので見えました。ここまで曳いたというのが2回回転をして、この位置に持ってきた。まるっきり角度は逆だったん



曳きやした岩澤宅の蔵

ですよ、今まで設置していた場所に。この入口が北を向いてたんです。ちょうど母屋と向かい合っていたような感じで、それをこっちに逆にしたわけです。これも **カンソウ** を見てもらったら配置も全部、私が考えた配置と全部逆だったんです。それは私は向かいもともとと思ったら、いやこっちだと。物置が真ん中で、お稲荷さん、その向こうだと。お稲荷さんもちょうど一里塚のはずれのところの榎木のあった大きな穴があいている切り株のところですね、そのところに祀ってあったお稲荷さんをこっちへまた移築したわけでございます。まあ、とりとめがないような説明になりましたけど、家の配置からここまでの経緯ということで、一つ御理解していただければと思いますので、よろしくお願いいたします。

石嶋：ありがとうございます。何かお聞きになりたいことがあれば。この蔵を移動する

ときの写真も撮られていて。

岩澤：枕木で全部ジャッキアップして、それで位置をこっちまで持ってきたんです。区画整理の補償の金額内で収まればよかった、でもたまたま手を加えることがなかったから、何とかそれでこの移設費用で賄えたというのが現状です。渡辺毅さんという上田のあそこの大谷石の蔵も、うちを見て、よし岩澤が頼んだんなら、うちもそこに頼もうということで、同じ業者がやりました。そこにも土蔵があったんですけど、このアパートの隣ですけど、あの人にも紹介したんですが、値段があわないからほかに頼むってやったんですけど、結局後で補修費用が大分かかりました。やっぱり曳き方によって費用が余分にかかるというのはありますね。

加地：その石仏が馬頭観音なんですけど、こちらでは馬を飼っておられたんですか。

岩澤：いや昔のことはわからないんですけど。ただ、家を壊したときに家の中に、私が覚えているのは牛小屋だったの。牛舎があって、その前に馬がいたんじゃないかと思うんです。だから、それも農耕馬だと思うんです。田んぼを耕したりするのに馬とか牛の力を借りて耕したというのが昔からのやり方ですから。多分そのために馬は多少いたかもわからないですけど、ただ、となりのお医者さんから言わせると、ここで馬力馬が来て、ここで休んだということを聞いたんですね。だからもしかすると、一里塚の中に馬の骨か何かが入っているんじゃないかなと言われたんですけど、あそこまでやるときに、それは出なかったですよ。

加地：今お聞きしましたら、そこにあります石仏の馬頭観音なんです。それが一里塚の中腹に当初あったということで聞いております。ですから、何らかの形で、馬頭観音は本来は人間の煩惱を食べると、食い尽くすというのが馬頭観音なんですけど、頭に馬をつけておりますので、今は馬とか牛の守り神、それからなお今ではペットの守り神になっていきます。非常に日野には馬頭観音は多いです。100 何基もありますので。

石嶋：ありがとうございます。飾っている写真の方を見て、万願荘の方に行きたいと思います。

(移動中)

石嶋：西川さんというお宅は変わらないそうです。西川さんのお宅を起点にして、道路が向かっていますよね。そこからずっとスパンしていくと、今見えないけど、中央道の橋脚が……見えないね、残念ながら。



岩澤泰宏氏撮影 昭和 60(1985) 年頃 左の家が西川宅

岩澤：梨畑の柵、これが田んぼなんです。これを 3 枚撮った写真がこれです。遺跡があったもので、土を埋めちゃったという。田植えをしている、機械でやっている絵があったと思います。それがちょうどこの写真でいくと、ここなんです。この辺で田んぼをやっているときの写真なんです。

石嶋：岩沢さんが撮られたものですか。

岩澤：じゃなくて、篠崎さんが撮ったやつです。

石嶋：今度の写真集に載っています。

岩澤：これが砂利道だったんです。雪印の車が、昭和 39(1964) 年、そのころに舗装が始まったんです、南口が。このときはまだ砂利道です、こちらは。この舗装ができたというのは、路線バスが立川から万願寺まで、乗り換えしていた、高幡まで抜けないで。駅のスタンドがありますでしょう、あのスタンドで折り返してだった。



土方幸夫氏駐車場

石嶋：これ高幡の方へ、これ手前が日野橋。

岩澤：そうです。日野橋の方ですから。これが一里塚に入る道です。これが昭和 33(1958) 年 4 月から開通したんです。私が高校卒業した年に開通したんです。だから立川に行くのに自転車で、それまでは。ちょうどここが中間なんです。立川まで歩いて 35 分、高幡まで 25 分、日野駅も 25 分。

(移動中)

生沼廣宅前（？？？）



岩澤泰宏氏撮影

石嶋：さっきのところですよ。この道、こっちは高幡で、ここから入ってきて日野の方に向かう。このオレンジが、これ逆方向から見たところですけど、オレンジの。ここがさっきいった一里塚の、だから裏手になるんですよね、岩沢さんの北側、ということだと。

岩澤：斉藤さんという家、煎餅屋さんの家が今でもあります。お稲荷さんが祀ってあって、その反対側が小林産業さんって屋根屋のスレートをやっていた工場があったんです。今、工業団地に入っちゃった。

石嶋：ありがとうございました。

(移動中)

加地：ここには昔、パーク日野店というスーパーがありまして、そこへ日野図書館のひまわり号、これがぐるぐる回ってまして、そのとき石嶋さんがその車に乗っておりました。日野図書館の原点みたいな、ひまわり号というのは原点ですから。それから、ここを行きますと、そのまま真っ直ぐ行きましたところ、これが先ほどから言っております万願寺への渡し、今の日野の渡しができる前の甲州街道です。これが渡しがあったところが万願寺のあったところで、それから真っ直ぐに先ほどの一里塚の方へ行ったら、我々が旧々甲州街道と言っているのはそこなんです。

(移動中)

鈴木治（万願荘）：万願荘は昭和 15(1930)年に日野町が誘致して日野自動車が大森の方からこちらにできたわけね。そのとき従業員がこっちの社宅に入ってきたんです。ここは一応さっき住川さんが言ったように日野万の日野を取って荘を取って、万願寺の字を当てて荘にして万願荘という地名になった。日野自動車はあと日野台と豊田と3カ所に社宅があった。それで終戦後日野自動車が会社になったもので、各個人で引き取って買ったわけです。それがそのまま続いております。現在、昔から住んでいる人は半分ぐらいかなと、

世代が代わっているのです、今住んでいるのは二代、三代の孫達はほとんどいないから。大体この自治会が 300 世帯。

渡辺：社宅というイメージで、ああいう感じだったの。

鈴木：だから、大体平均して 1 軒当たり 80 坪ぐらい。古い原型の家というのはほとんどないです。みんな新しくなって、売っちゃったりすると 3 戸建てになっています。これも昔の用水路です。昔は魚釣りをしました。

谷：いわゆる土だからね、ところどころ石垣で崩れないように。

鈴木：魚が上ってくるので。フナとか。

谷：日野市の大字日野の 7770 何番地というところなんですね。

鈴木：ここは大字日野なんだね。

加地：ついてますか。

鈴木：ついてますよ。

谷：正式には大字除かれたから日野市日野 7000 とね。

鈴木：戸籍上は残っていますよ。大字。

谷：いわゆる土地の在と一般表示と変わってきたんですよ。少しでも字を少なくするという考えでね、何々アパートと多くなるので、大字というのは除こうということで大字というのは、表示上は全部除かれたんです。

鈴木：皆さんね、荘とつくからアパートを思い浮かべる。でも来ると、戸建てだから。

加地：豊田の入口に住んでいるんですが、あそこがやはり広いんですよね、ほかのところよりも。



鈴木さん（中央の白い
帽子をかぶった男性）



昭和 20 年代中頃 安田智子氏所蔵

谷：豊田の場合は役員というか、偉い人が住んでいたんです。

鈴木：それで万願荘はその下の役の人、日野は工員という一般の人が住んでいた。

谷：そういうことになっているのでね、やはり日野自動車の万願荘、豊田荘と言ってもね、地位や役が、豊田が上で、ここが 2 番目で、一般の人が日野台と。それ以外のね困るのがね、

東町にアパートがあるんです、一般の人の。そういう経緯があります。

加地：官舎というのは日野台ですか。

谷：それは日野台。

(移動中)

鈴木：この正面が古谷栄さんところですよ。

石嶋：古谷栄さん（屋号「油屋」）のお宅で撮ったのがこれです。立川基地の司令官夫人を招いた時の記念写真です。



立川基地米軍司令官夫人を迎え

昭和 37(1962)年 天野嘉明氏所蔵

(移動中)



日野橋の渡り初め

大正 15(1926)年 真野保氏所蔵



石嶋：これ写真集に載っている歩道橋。この写真、これがここです。

谷：これは大正 15(1926)年日野橋の渡り初めのときです。この写真に出ているのは、これは三角（みかど）の滝瀬荘重さん、三角の三代。今は荘重さんと、今は三代目がやっています。当時また日野橋というのは……これはまだ新しいんですよ。この日野橋は昭和 12(1937)年頃はまだ。それ以前は木造だったんです。日野から立川に行く人たちは歩道がなかった。みんなリヤカー引いたりして行くんです。みんな不自由をして、場合によっては立川寄り、根川、一部橋げたが壊れちゃったんですね。そこを渡った時に足を怪我する人もいるようなこともあるわけです。現在では考えられないような木造。そこを渡って足を怪我した、今

では考えられないようなことがあるわけです。そういう時代です。私も昭和 20(1945)年、立川に行きましたときも自転車ではいつもここを通ったんです。そのときも道路が狭くて、木の橋が残ってありました。それも何で電車を使わなかったのかと言う人もいますけどね、当時 20 年から 30 年代ぐらいまでは、高幡、稲城の方の人も自転車で日野橋を渡って行ったんですよ。というのは、稲城の人だったら関戸橋とか是政橋がありますけれども、そういうところを通ると府中へ抜けて遠回りになるわけです。一番近い道はやはり川崎街道を来て、新井橋を渡って、ここへ来るのが一番近いんです。ですから、そういうことで日野橋を自転車で通勤、それから高幡の人でも、現在の立川高校へ来る人も、中には歩いて来る人もいる、自転車で。そういう時代があったんです。



仮橋 昭和 39(1964)年 5 月 3 日

天野嘉明氏所蔵

石嶋：これはオリンピックが昭和 39(1964)年に開かれたんですけど、その前にここを拡幅するということで、こういう仮の橋を架けたんですね。そのときに 1 枚です。

谷：わかるように仮の橋というのはコンクリートの橋じゃないんです。木の橋をかけるんです。

加地：日野橋という名前がなぜついたかということですが、立川と日野、本来だったら向こうにあります立川の、当時は日野の方は町であり人口も多いということで日野橋とつけたというふうに聞いております。

(移動中)

至誠第二保育園前



日野の渡し 大正 8(1919)年

佐藤元雄氏所蔵

井上：下流のところに・・・橋脚のこういう悪いのが、今崩れ去ろうとしているんです。去年まではちゃんとたっていたんですけどね。それは明治時代、電気を引っ張ったときの橋脚。今度の写真集にも載っているんですけども、昔の渡し場の下流の後側、送電線が通っている。それがここです。随分送電線移っているんです、いろんなところで。

鈴木：モノレールができる関係で、元線がすごく高くなったんですよ。交差していたりしているから、だから前の倍以上高くなった。

谷：前よりはちょっと低かったんです。特に関心があるのはね、私がちょうど昭和20(1945)年10月、二子玉川、陸軍部隊へ馬が要らなくなったので、軍馬が。軍馬を引き取りに本所さんが親方で取りに行ったんです。それで二子玉川の部隊で、それを引き取って、車が1台、あと馬が20何頭です。それを13人ぐらいで引き取って、狛江から調布を通って府中、こちらに帰ってきたんです。その今本所さんの米屋さんがありますが、その向こう側のところ本所さんの家がありましたから、そこで皆さんで取りに行った人で、必要な馬を持って帰ったんです。私は谷仲山の方で5頭ばかり引き取って、1頭は私の家で、あとは小池さんとか谷さんとかで分けた。

渡辺：競馬するときには、それぞれお家から持ってきて競馬したの。

谷：持ってきたのと、その後からも馬を持っていますから、それで、そういうような道具は今の立川の錦町の方に馬の関係の資材商があったわけです。そこでやはり物を払い下げるといので、それを聞いて、そこにもらいに行って、馬具とかいろいろな乗馬の靴とか、そういうのをもらってきた。それもやはり関係は、本所さんの次男坊が、言い方が悪いんですが、次男の人は**本所操**という人が軍属で勤めていたんです。そういう関係で知り合いがいたもので、それで払い下げがあるというのでもらいに行って、必要な人が分けて、それを使用したというようなところです。ここは特に変わっているのは、お店がもっとあったわけですね、甲州街道沿いにね。それがなくなって、特にいろいろ地域のことを調べている人には関係あるかしらんけれども、「勝五郎生まれ変わり」のところに関係がある松坂屋さんがそこに、日野の仲町からここに来て、今、程久保の方に引越しているというようなところでもありますし、大分変わってきております。本所さんも米屋さんとか、その向こう側には**操**さんがやっておっ



競馬場 昭和30年初頭

本所智恵子氏所蔵

た、当時昭和 40 (1965) 年代になって詐欺とかいろいろなことがあって企業が倒産したんですよね。そういう詐欺の関係で店が成り立たなくなったと、辞めて、余所に引っ越したというようなところですね。



渡辺：馬というのは、普段はそれぞれの農家が育てて。

谷：自分の家でもらったわけです。早く言えば。ですから、私は馬を何に使ったかという、私の家でもらったのは清姫という将校用の跳馬だったんですが、その馬を使って**ハンゴト**やなんかをみんなやったわけ

です。今でも人に言われるんですけども、大昌寺そばの松本水車ね、松本水車の前のところの田んぼは松本がみんな持っていたんです。そこの田の田おこしから田植えはほとんど私がやったんです。私の親父と。そのときにも私は立川に勤めていたけど、会社を休んで、よく怒られたわけです。長男でもないのにね、忙しいときに休暇を取るなんてとんでもないとね。そんなような思い出があります。ですから日野も当時は本当に水車があるし、田が多くて馬も必要だったわけです。ですから、日野には**馬力士**とか馬屋というのがあったんです。今でも下田の方にもあるし、仲町でも、やはり馬屋さんがあったんです。名前はやたらと言えないですけど、今は変わっていますけれども。そういうことです。万願荘の東町のどんどん焼きも一時ここでやったこともあるんです、最初は。今は向こうでやるようになりましたけどね、その当時は保育園ができてなかったものですから。

(移動中)

天野一利宅前（東町）



玉川亭 佐藤元雄氏所蔵

佐藤元雄（仲町）：佐藤と申します。うちは写真というのが何もないんで、ただ、うちの方で絵葉書というのをつくったんですね。先ほども言ったとおり、立川市よりは日野の方が発展、あるいは古い宿場町でしたので、立川よりはという形で、うちの方で絵葉書を 5 枚、あるいはこれも玉川亭の絵葉書なんですけど、そういうのを富士屋という屋号で 5 枚一組で発行した



んですね、それがこれでございます。私の方は全然歴史というものはわかりませんので、ただ言えることは、ここは桑園の後なんですけど、ばあさんなんかには言わせると、柴崎村の人がみんなこちらへ来て、桑園で桑を買って、それでやっていたというふうなお話をよく聞いてお

ります。それから話は全く変わりますけれども、私が子どものころは、ここは桑園ということで桑畑と、それと桑園の中にはお蚕がたくさんいまして、今ですと、私は釣りが好きなんで、今ですと釣りの餌というとすぐ釣具屋さんに行って買ってきちゃうんですけど、私たちが子どものころはお蚕を家で飼いまして、蚕がさなぎになって、それを乾かして、それを播りこぎで播って、今でいう播り込みという、餌を真ん丸くして針をたくさん刺して、昔は多摩川で釣りをしました。とのときには夜に仕掛け流し針、流し針という御存じないでしょうけど、今でいうと延縄漁ですね。多摩川に延縄といってテグスで川釣りをやると、うなぎが良く取れまして、うなぎとか鯉とかなまずとか、ちょっと余計なことですけど。私も先ほど谷さんのお話を聞いてて、いろんなことで勉強になったんですけども、今、振り返ってみると、30年前から40年前の姿とは全然違ったような形になりました。それから、この当時、アユということで、これは玉川亭だと思いますけれども、アユは、今でいうと、うなぎはどこだとか、例えば、炭だとか何やさんだとか、よく言うと思うんですけども、アユという、この日野の玉川亭に皆さん都内の方から偉い人たちが食べに来て、それで召し上がって帰ったというようなことを聞いております。説明としては以上でございます。

鈴木：これは鵜ですか。

加地：鵜飼なんです。

佐藤：鵜飼いですね。鵜飼いをやっていたみたいです。

鈴木：夜でなくて昼間。

加地：実は日野の多摩川の鵜飼いの特徴というのは、鵜匠は川に直接入って鵜を操るんですね。それを食べる人は舟に乗って見ているんです。長良川の場合は舟の上から鵜飼いをしますが、こちらの方は鵜匠は川に入るという形ですね。これが変わっているところ。

石嶋：ここで食べるんじゃなくて、玉川亭に戻って、そこで食べさせたんですか。

谷：これはただ鵜飼いを見物するだけなんです。見物のための見物船ですね。それで今

言われたように、鵜飼いする人はちゃんと自分が水の中に入って、鵜に紐をつけてそれでやってたんですね。ですから、その鵜飼いをしているときの写真があります。今度持ってまいります。私は佐藤さんの関係で、立川に行って立川の人が私のところに来たんじゃないかなと思って。

鈴木： こういう舟は何艘ぐらいあったんですか。

谷： 数は少なかったそうです。

鈴木： これは日野の渡しの舟の払い下げかね。

谷： いやいやそうじゃない、全然違うそうです。それでね、市として舟は日野の舟じゃないということっています。立川の人の舟が多かったそうです。日野のは、玉川亭はね、鵜飼いをする用意をして、それを見物するために立川の柴崎町の人がやっていたということを行っている人もいます。

加地： いずれにしましても、この多摩川のアユというのは献上アユです。だから、必ず將軍のところへ取られるので、まず將軍の分を数を確保して、それを確保ができれば初め一般の人のための漁ができるという形を取っています。このアユについての文書というのは非常に多く残っています。

谷： ですから、アユについては有名なのは長良川とか木曾川がありますけど、そのときの船というのは全然違います。やはり船をつかってちゃんと中で漁師が鵜を操りながら、1人が大体3羽から4羽操りながらやるので舟の形も違います。

佐藤： ちょっと余計なことなんですけど、アユというと、私、アユの友釣りが大好きで、図書館長の旦那さんも好きで、今、富山県の神通とかヨミシロとか、そういうところへ行くんですけど、私が子どものころは、あんま釣りというので、今は差別用語になっちゃいますけれども、やったときに、魚を取るときに、アユがあたるんですね。ですから、そのくらいアユがいて、今、考えると、その当時に振り返ってやれば、5時間も6時間もかけて天竜だとか、あんなところまで行かなくてもいいんじゃないかと、非常に悔やんでおります。

石嶋： ありがとうございます。

(移動中)

日野ふれあいホール

井上博司（大坂上）：位置的には今下から覗くと土台が見えているのが、ここが駐車場になっています。道路がびよーんとあって、ここが運動場で、あそこに今1棟だけ残っているのがこれになるんですね。これが事務所棟で、今ふれあいホールがこういうふうに住っていて、ここの並木が今、後を通して来たときに駐輪場の横に残っていたやつ。この辺のケヤキなんかはみんな残っていますね、ということです。下の壁にも何枚か貼ってあるので、これ位置関係見ると大体どれがどれかわかるということです。



蚕糸試験場付近のパノラマ写

真を説明する井上博司さん



蚕糸試験場事務所 前頁のパノラマ写真を含めすべて松本保氏撮影





石嶋：あと柱にもかけてあるので皆さん見ていってください。寒い中、大変ありがとうございました。お疲れ様でした。自由解散ということで、ここで今回のまち歩きを終了させていただきます。最初話しましたけれども、テープおこしをして記録を残したいと思いますので、また出来上がりましたら御覧ください。お疲れ様でした。ありがとうございました。

